

へん、しょうもない』て。口癖や、あいつの。ほんまは知らんので。そやのに知ったかぶりしやがね。これが腹立つがな。お前もよう言うてるやないかい。あの人に物食べさすの、かなんて」

「けど、そんなことして、大丈夫ですか」

「かまへんかまへん。『田舎から届いたんやけど、食べ方が分からん』て聞いたったら、『田舎もんでんな、そんなことも知らんのでっか、これはね』ちゅうて食いよるで。これ口に入れたらえらい臭いがするやろ。あいつがもがき苦しむの見て、日頃の鬱憤晴らそやないかい。けど、名前付けとかなあかん。何かええ名はないかいな。そや、この前、行ってもせえへんのに、長崎へ行ったちゅうとったな。長崎名産にしよ。あ、奥から娘の三味線が聞こえるな。『長崎名産三味線』では、おかしいな。ほな、『長崎名産チントンシャン』ちゅうのはどや。もう一つか。よっしゃ『長崎名産チリトテチン』にしよ。それでな、綺麗な包装紙に包んで、『元祖長崎名産チリトテチン』と書いてな。ほな、すぐ呼んできてくれるか。『長崎の知人から珍味を送ってきたんやけど、食べ方が分からんので教えてほしい』ちゅうてな」

「旦那さん、長崎から珍味でっか。懐かしいなあ」

「おまはん、行ったことあるて、言うてたやろ」

「へえ、昔、しばらく行ってましたんや」

「長崎で、どんなとこや」

「そうでんな。ちょっと変わってるのは、玄関の表札でんな。こっちでは、山田太郎と書きますけど、向うでは、そうは書きまへんね。太郎山田と苗字と名前を反対に書きまんね」

「へえー、何でやね」

「名が先」

「ほんまかいな。それでな、長崎の知人から『長崎名産チリトテチン』ちゅうのんを送ってくれたんやけど、食べ方が分からんね。お前は物知りやし、長崎にも行ってたちゅうし、多分知ってるやろと思て」

「へえへえ、『長崎名産チリトテチン』。知ってるも知らんもおまへんがな。向うにいた時は、毎日、朝昼晩、食うてましたがな」

「毎日、朝昼晩」

「へえ、こないうまいもんはおまへんで。で、それでっか。これや、これや。しかも、『元祖』。ほんまもんや。偽物も出回ってましてね、それは『本家』となつてまんね」

「堪えんな……それがな、お前の希望にぴったりのがあんね」
「ほんまでっかいな。で、どんな仕事でんね」
「トラや」
「えっ、阪神タイガースの監督でっか」（※この行と次の2行省略可）
「アホか、何で、いきなりそこへ行くんじや。ちゃうがな。ガオーや」
「あの猛獣の？」
「そうや、実は、ある動物園のトラが死んでな。トラは人気があるさかい、代わりのトラが来るまで、死んだトラの毛皮を被って、檻の中をうろうろするちゅう人を探してんね」
「そんなアホな奴おりまへんで」
「ところが、これがお前の希望にぴったりやね」
「ぴったりて、朝の早いのはあきまへんで」
「一〇時や、開園。で、四時に閉まるさかい、残業もなしや」
「力仕事も難しいのもあきまへんで」
「力なんか要るかいな。トラの毛皮被ってるだけや。難しいこともあらへん。檻の中をウロウロしてたらええね。昼寝もできるし」
「口下手は」
「トラがもの言うたりするかい。で、日当が一万円や。どや、ぴったりやろ」
「ようそんなん見付けてきましたなあ。しゃあないなあ。けど、言われてみたら、なかなか、ええ仕事でんな」

早速、次の日から、動物園でトラの代役を務めます。

「（檻の中をうろうろしながら）毛皮ちゅうもんは温い（ぬくい）もんやなあ。冷え症には具合ええわ。けど、慣れてくると、ただうろうろしてるだけでは、ちょっと退屈やな。あ、子供が来よった。悪そうな顔しとるな」
「このトラ、元気ないなあ。石ぶつけたろか」
「悪いガキやなあ。こういうガキは、ガツーンと言わしたらなあかんね。ウーッウーッ、ワン！あ、しもた、間違うた。あのガキ『トラがワン言うた』ちゅうて走って行きよったわ。こらおもろいな。お、今度のガキはおとなしそうやな。メロンパン持っとるわ。うまそうやな、食いたいなあ」
「お母ちゃん、このトラ、パン欲しそうにしてるで」
「アホなこと言わんとき、トラがパン食べたりするかいな。トラはお肉を食べますの」
「いらんこと言うおばはんやで……おい、パンくれ。パンくれ」

「お母ちゃん、トラがパンくれ言うてる」

「トラが物言うたりするかいな」

「そうかて、今、パンくれ、言うたもん。よっしゃ、半分やろ。ほれ、やるわ
(パンを投げる)」

「言うてみるもんやなあ。ほんまにくれよった。けど、毛皮被ってるさかい、
食えへんがな。(キョロキョロ辺りを窺って) よっしゃ今や!(毛皮から顔
を出してパンを食べる)」

「お母ちゃん、トラがパン食べたで」

「ケッタイなトラやこと」

「ああ、危ない危ない……あれ、場内放送や。何やろ」

「園内のお客様に申し上げます。ただ今より、特別イベント、猛獣ショーの始
まりでございます。トラの檻の前へお集まりください。これより、ライオン
をトラの檻の中へ放ち入れます。百獣の王ライオンと密林の王者トラとの世
紀の一騎打ちでございます。どちらが勝つか、とくにご覧くださいーい」

「おいおい、そんなん聞いてへんで。えらい条件ええなあと思てたんや。そん
な殺生な。あーあー、ライオンが入ってきよった。こっち寄ってきよる。シッ
シッあっち行け!あっち行け!」

「お母ちゃん、このトラ弱いなあ。ガタガタ震えてるで」

「そらそや。パン食べるようなトラ、強いはずがないがな」

トラはガタガタ震えております。一方、ライオンの方は、ノッシノッシとト
ラに近付いてまいります。トラはとうとうナンマンダブ、ナンマンダブと念
仏を唱えだしよった。

ライオンは大きな口をガバーッと開けると、トラの耳元で

「心配すな、わしも一万円の口や」

(次回は、はてなの茶碗、鉄砲勇介の予定)